

主権者意識を育む社会科授業の創造 II

ー共助の担い手を育てる防災・減災学習ー

佛圓 弘修¹⁾・野元 祥太郎²⁾

広島都市学園大学 子ども教育学部¹⁾・広島市立矢野南小学校²⁾

要 旨

本稿では住民自治の基盤となる共助を構築していく社会科授業の実践事例を取り上げる。未曾有の自然災害に直面した学区の小学校が自分事として自然災害と向き合い、誰一人取り残さない防災・減災を目指して自分にできることを考える授業である。さらに、共助の担い手として町づくりに積極的に参画し、自然災害に強い住民同士の絆を構築していくために学習したことをいかして主体的な行動につなげていくことのできる教材化と授業化を試みた。試行錯誤しながら探究した経緯を紹介することとする。

キーワード：共助、担い手づくり、住民自治、主権者意識、防災・減災学習、少数異質

はじめに ～ 自然災害を自分事として捉え町づくりの主体者意識を醸成するために

平成29年告示の小学校学習指導要領改訂にあたっては社会科における防災・減災学習の扱いがより大きな比重を増してきている。昨今の異常気象に伴う自然災害は全国各地に大きな被害をもたらしていることから、国土の自然条件との関連で発生している事実や公助の働きについて丁寧に理解し、防災情報に関心をもったり防災意識を高めたりすることが求められている。第5学年の目標には、多角的に社会的事象の意味を考えたり、国土への愛情や将来を担う国民としての自覚を養うことまでを求めており、自助やわが町の身近な共助についてもそれを自分事として主体的に捉え問題解決させていこうとする視点を持たなければ達成することにはならないはずである。

本稿ではとりわけ住民自治の基盤となる共助に視点を当て、その担い手としての意識を高める防災・減災学習を探究した。その際、本学ひろしま人間教育研究センターがここ数年研究交流提携を続けてきた広島市立矢野南小学校（以後、矢野南小学校）の野元祥太郎教諭の全面協力のもとに、教材化及び授業化を図り実践分析をすることができた。

1 構想ー第5学年「自然災害を防ぐ～だれ一人取り残さない防災・減災をめざして～」

(1) 西日本豪雨災害と矢野南小学校区の状況について

国土交通省によると、広島県は比較的降水量が少ない地域であるのにもかかわらず土砂災害危険箇所が約3万2千か所と全国一位であり、これまでも多くの水害に遭ってきた。広島県の山がちな地形と県全体に広く分布するマサ土などの自然的な要因や宅地開発など

の土地利用の要因が大きいのであるが、このような本県において、平成30年7月6日、西日本各地を記録的な豪雨が襲った。線状降水帯の発生による長期間にわたる豪雨にともなう河川氾濫や浸水害、土砂災害、「7.6 西日本豪雨災害」である。広島県内の死者は100人を超え「平成最悪の水害」と呼ばれた。

広島県内でも各地が被災したが、矢野や矢野東といった地区は特に被害が大きかった地域である。そして、矢野南小学校区もその被害を受けた地域である。学区内の山側の地域（主に三・四丁目地区）は土砂崩れを起こし、生活道路には土砂や水があふれ、多くの住民が避難した。また、多くの死者も出た矢野東七丁目は学区に隣接する地区であり、体育館は広島県最大の避難所となり、多くの被災者によって利用された。しかしながら、実際に被害の状況を目の当たりにした住民とそうでない者、また避難した住民とそうでない者等々、住民たちの間においても豪雨災害に対する認識や防災意識に大きなギャップがあることも事実である。町全体として、災害の歴史をどう受け止め、後世に残していくか、ということは大きな課題になっている。

（２）災害生時における「共助」と「災害弱者」の問題

西日本豪雨災害発生後、「共助」の重要性がさらに強調されてきた。少子高齢化や家族構造の変化や都市化、産業化などによって人々の関係性（つながり）が希薄化した、と言われる今日において、「災害時における地域のつながりの重要性」を訴える声はなおさら大きい。ところが、いくら大切だと訴えられたところでその価値に気付くのはそう簡単ではない。西日本豪雨災害の体験談集に目を通すと「災害に遭って（やっと）日頃のつながりの大切さがわかった」という趣旨の記録が散見されることによく表れているだろう。

そこで、本單元においては、災害時における「災害弱者」にかかわる問題を取り上げることで、より「共助」の重要性を実感させることに重点を置いた。広島県は、西日本豪雨災害のあと、『助け出す』ことより『連れ出す』ことをまず、考える」というキャッチフレーズを打ち出した。国土交通省によると、西日本豪雨災害における死者のうち約9割が65歳以上と発表されている。小さな子どもや高齢者の家庭において避難が遅れる事実を取り上げ、「危ないから避難しよう」という地域での声のかけ合いの大切さを訴えるキャンペーンである。

（３）避難行動要支援者名簿の作成と課題・洋国団地の事例

災害時に避難に困難さを抱えている人たちが逃げられず死に至るという事例は、これまでの自然災害においても同様であった。そこで、内閣府では平成16年、梅雨前線豪雨等を契機に「災害時要援護者避難支援ガイドライン」、平成26年には災害対策基本法を改訂し、「避難行動要支援者名簿」の作成を各自治体に義務付けた。また、国はその名簿に基づき、一人一人を担当する支援者や避難場所、経路などを盛り込んだ対象者ごとの個別計画を作ることにも推奨している。西日本豪雨災害で大きな被害を受けた東広島市・洋国団地の「担

当者制度」はこの一つである。洋国団地では、防災リーダーの大野昭慶さんを中心に、災害弱者の避難誘導を促す「担当者」を決め、日ごろから団地で避難訓練を実施してきた。西日本豪雨災害では、死傷者ゼロという結果を残し、多くのメディアで取り上げられた。ところが、このような災害弱者の個別の避難誘導の計画・策定は多くの自治体で進んでいない。そして、実際の災害時に効果的に活用されていない。これにはいくつかの要因が考えられる。ひとつには、高齢化による支援対象者の増加があるが、一番の要因は、支援者の問題であろう。現在、支援の担い手の中心として想定されているのは多くの場合各地域の民生委員である。ところが、たいてい彼らもまた高齢者である（矢野南小学区も同様）。そして、災害時の切迫した状況において、広範囲に住むたくさんの要支援者を、数名の、しかも自身も高齢である民生委員が避難行動を促すということ自体に限界が生じている。先に挙げた東広島市・洋国団地も同様の課題を抱えており、後継者の育成が課題となっているところである。このように、実際の災害が発生した際には、特定の誰かに依存するのではなく、地域住民ひとりひとりが自主的・自治的に災害弱者の避難行動を促すことが、全員の安全な避難につながる。洋国団地の例を成功事例として共有しながら、地域社会が抱えている問題にも着目させることで、児童自身が共助の働きに加わる意欲を高められるようにする。

（４）地域の防災活動への一人一人の参加の必要性

以上のように、災害弱者の避難行動を促す対策を話題として取り上げることで、今日の地域社会がかかえる課題が見え、児童自身が地域の防災活動へ社会参加していく必要性が明らかになると考えた。矢野南小学校区は、ニュータウンにありこの数年で少子高齢化が急速に進んだ地域である。実際に、西日本豪雨災害の際には、近隣どうして声をかけ合うことで避難できたという事例もある。自分たちの地域の課題とも結び付けて考える時間を設けることで、自分たちの地域の防災の在り方について意見をもつこともできると考えている。そして、今の「自分の立場でできること」のひとつとして地域の防災活動への主体的な参加について考えさせる。

２ 主体的に挑む児童の育成

（１）本单元にかかわる児童のレディネス

児童は、本单元にかかわって、矢野南小学校が独自に開発した教材として、第3学年社会科において「安心・安全なまちづくりーそうめんで結ぼう、地域のつながり」という学習をしている。これは、地域の防犯活動をする一方で、地域行事を企画・運営することにより、人々の共助の仕組みを作っていこうとする地域の人々の働きについて考える学習である。中心的な団体である矢野南青少年健全育成連絡協議会が、次世代の地域の担い手を育てるべく中学生ボランティアという仕組みを作っていることも特筆すべき点である。地域行事を通して、持続的に安心・安全なまちをつくっていく人々の工夫や努力について学

習してきた児童が改めて「共助」について考えるきっかけが本単元であるといえる。

(2) 学級の児童

また、矢野南小学校では、これまで継続して「違いを認め、学び合う授業づくり」という研究主題を掲げ、自尊感情に裏打ちされた学力の向上を目指し授業研究を推進してきた。特に、互いの人権（学習権）が尊重された学習環境の中で学ぶことができるよう、学習交流リーダーを育成し、小集団（班）でのかかわりを生かした学習集団づくりを大切にしてきた。そのような中で、自分の感情や思いを素直に表せる児童が増えてきているが、それは未だ「つぶやき」程度である。全体の場合であってもある程度の発言をすることができるようになってきたが、自分の考えに自信がなかったり、自分の立場や意見を求められるような場面になると全体の場合では発言しづらかったりする児童が多い。異質な考えを集団思考に位置付けることで、授業や学級への居場所感や役立ち感をより高めていきたいと考えてきたが、まずは全員の考えや思いの表現を丁寧に保障することに取り組み直す。また、もう一点課題に感じているのは、授業や生活場面で困り感を抱えている仲間へのかかわりである。本学級にも様々な面で困り感を抱えている児童が何人かいる。落ち着いて話を聞くことが苦手な児童や自分の感情をコントロールすることが難しい児童、友だちに強い口調で自分の意見を通そうとしてしまう児童などである。今特に課題を感じているのは、彼らとかかわることを班長や一部の子どもたちだけが担っているような構造が学級にあることである。「自分はちゃんとできているからいいや」「あの子は困っているけど、きっと誰かが声をかけてくれるだろう」というような誰かの善意に依存する考えや自分本位な考えから、みんなで困り感を抱える仲間気付いていける学級の風土をつくっていききたい。そのために、授業において、教師を介するのではなく、互いの発言を全員で聴き合い応答していくような風土を作り直したいと考えている。そのような風土の上に、困り感のある子の発言や行動にも全員で向き合えるようにしていく。

3 自分事として迫らせる指導

(1) 学習問題の設定

本単元では、「どうすれば、豪雨災害から一人でも多くの命を守ることができるのだろうか」という単元の学習問題を設定する。単元全体を通じて、自分たちの身近な地域である矢野や矢野南の町の事例を取り上げることで、より主体的に学習に参加し、自分なりの社会参画の仕方を考えられるようにする。第一次（であう）では、始めに日本全体の様々な自然災害を概観した上で、自分たちの町の事例と出合わせる。

単元の学習問題を考えていくことで、自分たちの町での経験をきっかけに日本全体の防災に生かせる教訓を見つけていくという問題意識を生みたい。第二次（ふかめる）では、西日本豪雨災害を事例に、実際に行われている公助・自助・共助を取り上げていく。その際、公助の限界については言及しながらも、三助のうちの単独では不十分であり、三助の

バランスが整った防災対策が重要であるという立場で授業を進めていく。そして、第三次（いかす）においては、矢野南の町の実態と照らし合わせながら、今の自分の立場でできることについて提案するという単元構成になっている。各単位時間には、その時間の主要な問いを明らかにすることで、教科認識にかかわった全員の学習参加を促していく。そして、小集団（班）を生かすことで、自分の立場を明確にしたり、多様な意見が全体で表出されたりすることをねらう。

（２）単元の目標設定

- 我が国における自然災害やその防止の取り組みの様子に関心をもって意欲的に調べ、防災のための具体的対策や自分にできることについて考えようとする。
- 我が国の国土では自然災害が起りやすく、国や都道府県などが様々な対策を進めていることや、国民一人一人が協力したり防災意識を高めたりすることが大切であることを理解する。
- 我が国における自然災害やその防止の取組の様子に関わる地図や各種資料を活用して必要な情報を集め、読み取ることができる。
- 我が国における自然災害やその防止の取組の様子から学習問題を見出し、自然災害の防止と国民生活や自分自身とのかかわりについて思考・判断したことを適切に表現する。

（３）指導計画及び本時の学習展開（全 7 時間）

第 1 次 西日本豪雨災害と矢野の町・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2 時間

- （１）なぜ、日本では自然災害が多く起こるのだろうか。
- （２）広島県では、どんな災害が起こってきたのだろうか。

＜学習問題＞どうすれば、豪雨災害から一人でも多くの命を守ることができるのだろうか。

第 2 次 自然災害から命を守る取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4 時間

- （１）西日本豪雨災害とは、どんな災害だったのだろうか。
- （２）広島県は、豪雨災害を防ぐためにどんな対策をしているのだろうか。
- （３）なぜ、「全員避難」の指示が出ていたにもかかわらず、多くの人が避難しなかったのだろうか。
- （４）どうすれば、避難が難しい人の命も一人残らず守ることができるだろうか。＊本時①

第 3 次 矢野南の町のために私たちができること・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 時間

- （１）矢野南の町の人々の命を一人残らず守るために、今わたしたちはどんなことができるだろうか。＊本時②

【本時①の目標】	
災害発生時に、災害弱者も含めたより多くの人の避難行動を促すために必要なことについて考えることができる。(思考・判断・表現)	
学習活動と内容	■指導上の留意点 □評価 ☆資料
<p>1. 前時の学習を振り返る。また、「災害弱者」の存在に気づき、本時の学習問題を設定する。</p> <p>○災害のとき避難したくても避難することが難しい人には、どんな人がいるだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者 ・けがをしている人 ・車いすの人 ・障害がある人 ・外国人 ・子ども 	<p>■避難行動は個人での判断が難しいという事実や避難準備の不足といった問題について想起する。</p> <p>■災害弱者の死亡率が7割以上である事実を取り上げることで、本時の学習課題への関心が高まるようにする。</p> <p>☆グラフ「西日本豪雨災害における死亡者年代別割合」 「障害のある母娘の死」(NHKハートネットTV)</p> <p>■前時で考えた全員避難のためのアイデアに、加筆・修正し考えることを促す。</p>
<div>どうすれば、「避難に困っている人の命も」一人残らず守ることができるだろうか。</div>	
<p>2. 本時の学習問題について考え、意見を出し合い、話し合う。</p> <p>○どうすれば、避難に困っている人の命も一人残らず守ることができるだろうか。</p> <p>(公助)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・消防署の人が真っ先に助けに行く。 <p>(自助)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で助け電話を求める。 <p>(共助)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近くの人が声を掛けていっしょに避難する。 ・自分の近所で困っている人と仲良くなる。 	<p>■児童の意見を「誰がするのか」という視点で以下のように整理して板書することで、地域防災の主体に注目するようにする。</p> <p>■人々のつながりの希薄化を示すことで、共助の実行の難しさに気付けるようにする。</p> <p>☆グラフ「近所付き合いの人数」(情報通信白書)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「公助 (役所や消防署, 警察が)」 ・「自助 (一人一人が)」 ・「共助 (町のみんなが)」

<p>○これって、だれが取り組むことだろう。本当にみんな実行してくれるだろうか。</p>	<p>■洋国団地の取り組みをイメージ化して提示し、自分の立場を決めて賛否を話し合うことで、以下のような点に気付けるようにしたい。</p>
<p>3. 洋国団地の事例から、全員避難において重要なことについて話し合う。</p>	<p>■洋国団地の成功事例がある一方で、多くの自治体が「担当者制度」を取り入れることに躊躇がある、という話題を取り上げることで、以下のような点に気付けるようにしたい。</p>
<p>○あなたは、矢野南の町で担当者制度を取り入れることに賛成か、反対か。</p>	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <p>(1) 社会全体や地域社会が高齢化していて、要支援者が 増えていること（要支援者（被支援者）の問題）</p> <p>(2) 地域防災の担い手が足りないことや高齢化（支援者の問題）</p> <p>(3) 以上をふまえ、担当者に依存するのではなく、一人一人が共助の担い手となること</p> </div>
<p>○なぜ、ほとんどの町は、洋国団地のように「担当者制度」にしないのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お年寄りや障害がある人が増えているから。 ・支援をする人が足りないから。 ・支援をする人もお年寄りだし、遠くまで行くのは危険だから。 	<p>☆テレビ朝日ニュース番組「東広島市・洋国団地」</p> <p>☆矢野南地区「民生委員だより」</p>
<p>4. 洋国団地の方のインタビュー動画を見て、災害弱者も含めた全員が避難できるために大切なことを改めて確認する。</p>	<p>■洋国団地の人のインタビュー動画を見ることで、若い世代も一人一人が地域の防災活動に加わっていくことの大切さや日ごろからの地域のつながり作りの大切さを実感させたい。</p> <p>☆洋国団地の人のインタビュー動画</p>
<p>5. 本時の学習問題について自分の考えをまとめる。</p>	<p>■本時の学習問題について、考え直したことを含めて記述し、第3次の学習に生かすことができるようにする。</p> <p>また、学習の振り返りを書かせる。</p>

＜本時の終末にめざしたい子どもの姿＞

- 災害発生時に、近くの人どうして声をかけ合い避難することが大切だ。
- 災害発生時に「助け合う（共助）」のは、他の誰かではなくて、「自分」であることが大切だ。

4 児童の挑みかかり

(1) 本時①発話応答記録

※一部抜粋

指 導 言		児 童 の 反 応		考 察
	・ (略) ・		・ (略) ・	・ (略) ・
T38	・ ・ この民生委員さん 8人が矢野南が災害に あった時に避難に困っ ている人を助ける担当 者です。(小学生、高 齢者の家族数提示)で は、ノートに賛成か反 対か、その理由も書い てみましょう。実は先 生も悩んでいます。 では、どっちから聞こ うか？ では少ない反対から。	C n C89 C90 C91 C n C92 C93 C94 C95	(各自、ノートに書く) 少ない・・・反対から。 反対です。付いて来てくれる人も いれば、付いて来てくれない人も いると思うからです。 8人だったら <u>短い時間に沢山の</u> 高 齢者を助けるのは無理だと思う。 (班話し合い) 高齢化が進んで高齢者が増えてい て、 <u>一人でも守らないといけない</u> <u>から。高齢者を放っておくのは可</u> <u>哀想！</u> <u>矢野南は坂が多いから、ここまで</u> <u>くるのが大変な人もいますから助け</u> <u>てあげた方がいいと思う。</u> 高齢者を助けることで、高齢者だ けじゃなくて、 <u>小学生の命も守る</u> <u>ことができるから。</u> もし今の8人が助けようとして、 <u>その時に土砂災害が起きたらみん</u> <u>な亡くなってしまうから反対で</u> す。それこそ、沢山犠牲者が出る と思う。	◎「災害弱者を共助 によって救わねば ならない」と口で は簡単に言える が、実際には様々 な困難が伴うこと を5年生なりに予 想し探究させよう としている。 ◎少数ではあるが、 困難を予想し反対 意見を記入する児 童が見られた。 ◎日頃から少数異質 が受容され全体で 吟味していく授業 風土が生かされて いる。 ◎論点が焦点化され 切迫感のある白熱 した話し合いにな ってきている。 ◎「一人（の命）で も)」を経由して、 「小学生の命も守 る」点に着目し、 防災・減災の本質 を自分事として捉 え始めている発言 が生まれている。 ●ひとたび発生する

<p>T 40</p>	<p>・・・・・・この矢野南の中の民生委員の方に実際に聞いてみると、「うーん」と難しい顔をされました。・・・・矢野南の町も、実はとても困っています。これからみんなはどうしたらいいのかを次の時間にもっと考えてみましょう。</p> <p>・ (略) ・</p>	<p>C 96 8人で沢山の人を避難させるのは、担当者の人が危ない！</p> <p>C 97 似ています！例えば、こういう担当する人が一人でも用事とかでいなかったりしたら、他の人が担当者としてもう一人を助けなきゃいけないし・・・・。ちょっと本当のことをズバリと言うけど、例えばこの8人の中でも将来的に足が悪くなったら大変だし・・・・確かにこういう人たちを助ける必要はあるけど、<u>まず自分を助ける自助を行ってからやらないと、自分の命も危なくなるから</u>。しかも、<u>災害ってめちゃくちゃ時間があるか、わからないから</u>。</p> <p>C 98 先ず、<u>もしもこの人が大丈夫だっ</u> <u>て言ってここに時間がかかったと</u> <u>したら</u>、もしもこの人が他の所に行かないといけないとしたら、その一人が危ない！高齢化率も12.3%だから、<u>もうちょっといい方法があるんじゃないかと思う</u>。</p> <p>・ (略) ・</p>	<p>と一刻も猶予がないことを実感しているが、だからこそ『早期避難』の必要性を考えさせたい結節点であった。</p> <p>●C 96, C 97は緊迫した状況にわが身を置いているからこそ二次災害に巻き込まれる危険性を説いているのだが、こうした弱者が自助がままならない状況に立ち返らせる必要があった。</p> <p>◎C 98は「正常性バイアス」に着目した発言である。これこそが早期避難の最大の障壁になることを押さえておく必要がある。次時に、わが町の共助システムを自分事として問題解決し自分もその担い手の一人になっていく意欲と自覚を創出していくためにも避けては通れない実践課題である。</p> <p>・ (略) ・</p>
-------------	--	---	--

(2) わが町の担い手として

【本時②の目標】(第3次-第1時)	
自分たちの町において、一人残らず命を守るためにできることについて、矢野南地区での取り組みや実態と関係付けながら考えることができる(思考・判断・表現)	
学習活動・内容	■教師の働きかけ □評価 ☆資料
1. 単元の学習問題を振り返る。また、西日本豪雨災害における自分たちの町の被害を想起することで、「いかす」場面における学習問題を設定する。	■西日本豪雨災害における矢野南の町の被害の様子や矢野地区の「水害之碑」(1907年)を取り上げることで、これから先に自分たちにできることについて考えることができるようにする。
矢野南の町の人の命を一人残らず守るために、わたしたちにはどんなことができるだろうか。	
2. 本時の学習問題について自分の意見を記述する。	■前時までの学習を想起し、どのようなことが課題であったか全体で再度確認できるようにする。
3. 本時の学習問題について話し合う。 ・近所で避難に困っている人とどうやって避難したらいいか、避難の仕方について話し合う。 ・自分の家から避難所までどんな道を通ればいいのか、確認しておく。 ・すぐ避難ができるように用意をしておく。	■ここで「防災」と「減災」の概念を整理し、本時では「減災」の発想で自分にできることについて考えることを確認する。
○どうすれば、避難に困っている人に気付く・知ることができるのだろうか。	■全体で交流する際は、「自助」「共助」「公助」の視点で板書に整理していく。一方で、災害弱者の視点や避難行動の低さの話題を想起させることで、「共助」の大切さをもう一度確かめたい。
(「避難に困っている人に気付く」という視点) ・近所にはどんな人が住んでいるのか、話をする。 ・地域の行事に参加して、近所の人の顔をもっと知る。 ・自分がもし避難に困っても助けてもらえるように、地域の人と仲良くなる。	■切り返し発問によりねらいたい。 (1) 避難に困っている人に気付いたり、知ったりするために必要なことと現在町で行われていること(行事や挨拶運動など)が結び付くことができるようにする。 (2) 避難に困っている人に気付いたり知ったりする、ということが子どもである自分が「人のために」できることの一つであることにも気付くことができるようにする。
4. 本時の学習を振り返る。また、災害後、矢野や矢野南の町で行われた取り組みについて知る。 ☆TSS番組「大切な人を失わないために」視聴	□自分たちの住む町において防災・減災においてできることについて考えることができる。(思考・判断・表現)

5 まとめと今後の課題

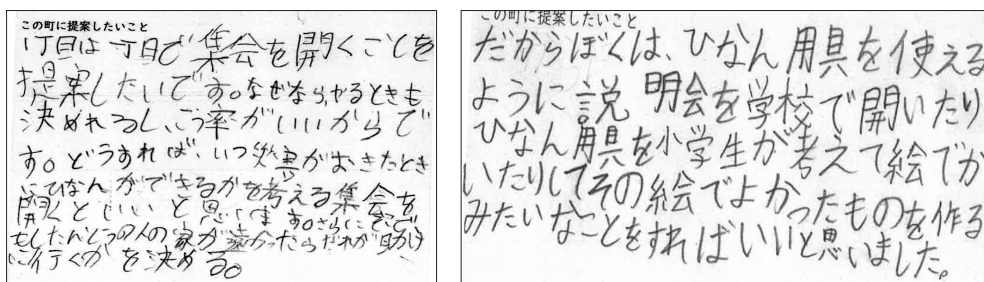
(1) 少数異質を起点にした対話の中で

本時①では、野元が積極果敢に経営してきた授業風土が芽吹き、共助を突き詰めて具体化したともいえる「担当者制度」についての賛否を問う対話的な学習が生まれた。ここでは、野元は授業者としてできるだけ口を挟まず児童の絡み発言で対話を構成しようとした。特筆すべきは、対話の起点となった少数異質の反対派を取り上げたことである。刻々と事態が深刻化する中で、それが本当に機能するか否かを児童は自分事として真剣に議論したのである。矢野南小学校が学校態勢として取り組んできた「自尊感情に裏打ちされた学び合い」を基盤にしながら、他者の意見を尊重し、自分の意見を建設的に主張している様子がうかがえる。「考察」でも指摘しているように、緊迫した状況の中での共助の困難さを理解しながらもかけがえのない命を守るためには、とりわけ自助が困難な社会的弱者の命は迅速で緊密な共助によってしか救えないことに気付き始めている。また、小学生も高齢者と同じ災害弱者であるという視点から対等の目線で考えた時、予定調和的な傍観者の視点や上から目線の「してあげる」的発想を超えていける可能性も示唆している。

そういう意味では、C98の「正常性バイアス」に直面した時の『もうちょっといい方法』は、新たな学習問題として探究させていく必要性があったかもしれない。「早期」にこのバイアスと対決するのはさらに難易度が上がるが、「早期」だからこそ克服できる『方法』もある。

(2) 社会科授業における「いかす」を大切に

野元が追い打ちをかけるように企図した本時②では、この視点を教師側から提示することはしていないが、「学習問題への答え」（ワークシート）からは児童が主体的に共助の担い手として自覚的に参画していこうとする意識がうかがえる。



「学習問題への答え」（ワークシート）より（左：A児 右：B児）

A児の「(大人たちと対話し合う)集会を開きたい」やB児の「避難用具を使える説明会を学校で開催し小学生が考案した避難用具も提案した」に象徴されるように、問題解決方法が主体的かつ創造的に具体化され始めている。A児の「たんとあの人(の)家が遠かったらだれが助けに行くかを決める」は、場合によっては近所の「ぼく」が声をかけることも

暗示する。「ぼくも逃げるからおじいちゃんも逃げよう！」の声かけで早期避難が実現した他地域での事例もある。多くの児童が「集会（行事）」の必要性を回答しており、その中には、リアルな現実（竹本さんの苦渋）を共有し共に知恵を出し合って「矢野南の『命』を救っていきたい」という主張も感じられる。また、発表交流会や宣言メッセージといったものではなく、地域住民と膝を突き合わせてリアルな課題を共有し、子どもらしい発想で打開策を練り合っていくような「町づくり（子ども）議会」を実現させたいと熱望している。Jr.防災リーダーとしての自覚や町づくりの担い手としての行動化につながる主体（権）者意識が芽生えており、こうした具体的提案はやがて大人を元気づけていくに違いないのである。

東日本大震災を経験した地域では「中学生が『主導する』防災教育や地域防災訓練（仙台市立郡山中学校）」などが積極的に展開され、恒常的な水害と向き合わざるを得ない地域では「子どもが主体的に参画する防災に強い町づくり（岐阜県恵那地区）」がごく当たり前の取組として積み上げられてきている。公助における地方自治とのかかわりは重要であり、公民分野から始まる第6学年の社会科学学習やその延長にある中学校、高等学校社会科でもさらに系統化される必要がある。しかし、共助における住民自治の課題は、小学校第3学年から取り組まなければならない課題であり、地方自治と住民自治は不可分なものとして捉えさせる必要がある。自助に苦しみ公助頼みに終始するのではなく、「この町（国）に生まれてよかった」「だからこの町（国）をもっと良くしたい」と実感し、今自分にできることを行動化していく力は、やがて選挙によって政治に参加できる公民としての資質につながっていくであろう。

主要参考文献

- 江原勝幸「災害弱者援助における地域ネットワークの活用」『静岡県立大学短期大学部研究紀要』2005年。
- 長尾彰夫『学力保障と人権教育の再構築』明治図書出版、2005年。
- 立木茂雄「災害時要援護者支援の課題と対策－市民、地域、行政に求められること」『都市問題研究』2007年。
- 中邨章『危機発生！そのとき地域はどう動く－市町村と住民の役割』第一法規、2008年。
- 片田敏孝『人が死なない防災』集英社新書、2012年。
- 松浦雄典「社会科における批判的参加学習としての授業構成－小学校第4学年「安全な暮らしを守る人たち」を例に」全国社会科教育学会『社会科研究』第79号、2013年。
- 立田慶裕『教師のための防災教育ハンドブック』学文社、2013年。
- 藤井聡・唐木清志『防災まちづくり・くにづくり学習』悠光堂、2015年。
- 諏訪清二『防災教育の不思議な力：子ども・学校・地域を変える』岩波出版、2015年。
- 中村誠「避難行動要支援者の個人情報の取扱いに関する法制と課題」『臨床法務研究』2016年。
- 立木茂雄『災害と復興の社会学』萌書房、2016年。
- 松岡靖「災害社会学の成果に基づく社会科『災害单元』の開発研究（1）」『京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要』2017年。
- 広島市立千田小学校『研究紀要～学ぶ力を高める』2017年。
- 由井菡健『一人ひとりが考え、全員でつくる社会科授業』東洋館出版社、2017年。

- 中国新聞社『西日本豪雨2018. 7』2018年。
- 勢良寛「豪雨災害を機に萌芽した市民活動〜がんばろう！矢野〜」『矢野・発喜のしおり』2019年。
- 海堀正博・柳迫長三『平成30年7月豪雨災害（広島県）体験談集』2019年。
- 谷山宏典『ドキュメント豪雨災害：西日本豪雨の被災地を訪ねて』山と溪谷社，2019年。